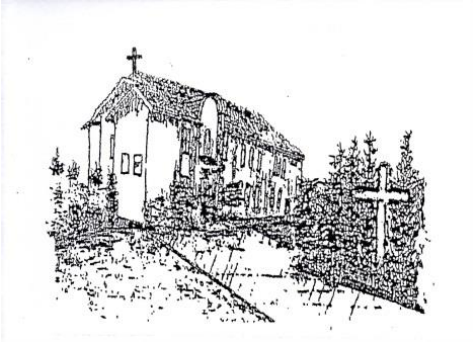

月 報

№.４５１
２０１７年
１２月

日本キリスト教団
茅　ケ　崎　香　川　教　会
茅ヶ崎市香川1丁目 34－35
http://kagawachurch.jimdo.com/

説教 『 神はあなたを知っておられる 』

（大人と子どもの合同礼拝）

ヨハネによる福音書 １０章７節～１８節　　小河信一 牧師

ヨハネ福音書 10:14――

わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。

今日は、詩編 23 編とヨハネ福音書 10 章をもとに、「神はあなたを知っておられる」という主題でお話をします。

羊飼いが、羊、一匹一匹を知っているように、神は私たちのことを、それぞれによく知っておられます。

羊が五十匹、百匹いたとしても、羊飼いはその一匹の特徴、その名を知っていると言います。羊は毛におおわれていますから、一見、区別しにくいように思われます。しかし、良い羊飼いは、自分の羊を見分け、一匹一匹を知っているのです。

そのように、神はあなたのことを知っていると、聖書に書いてあります。

今回、近隣の地域に配布したチラシのタイトル「神はあなたを知っておられる」を見た人は実際、どのように思ったのでしょうか？　あなたのこと、あなたのすべてを知っています、と聞いたときに、何か心に感じることがあったでしょうか？

怖(こわ)いことだなという気持ちが、最初に湧(わ)いてくるのでしょうか。あるいは、人によっては、神が人間のことを知っているというのなら、それを証明してくださいと言われるかも知れません。

そこで、「証明」することにはならないかも知れませんが、聖書は、「神はあなたを知っておられる」ということについて、どのように説明しているか、お話ししましょう。

三つのポイントに分けて述べます。第一のポイントが最重要なことで、それに付随(ずい)して、第二、第三のポイントへと展開していきます。

第一のポイントは、詩編 23 編とヨハネ福音書 10 章とが語る「神はあなたを知っておられる」についてです。

そこで強調されているのは、「神はあなたを知っておられる」とは、「神はあなたの苦しみを知っておられる」ことに他ならないということです。あなたのすべてを、神が知っておられる中でも、特に「あなたの苦しみ」に、神は心を留めておられます。そして、その「苦しみ」はまた、「わたしを苦しめる者」・「わたしの敵ども」（詩編 23:5）と表現されています。苦しみ悩んでいる人の目には、さぞやその敵は大きく強く写ることでしょう。

ところで、本日の説教題「神はあなたを知っておられる」は、ある種、力強い言い方です。

ペトロの手紙 一 5:7――

神が、あなたがたのことを心にかけていてくださるからです。

この文の直訳は、「彼（神）には、あなたがたのことが心にかかっている」（比較参照：ヨハネ 10:13）で、優しい言い方になっています。あたかも神と人とが対等の立場にあるかのように、「あなたがたのことについては、神が心を砕いておられる」というのです。まことに、神は低いところに来て、へりくだって、あなたの悩み苦しみを受け止めてくださっています。

それでは、私たちの苦しみや悩みとは、一体、何でしょうか？　わたしの敵とは、何か、誰か、あなたはどのように考えますか？

ヨハネ福音書 10 章には、「盗人(ぬすびと)」、「強盗」、「狼(おおかみ)」が出てきます。残念ながら時に、自分の物を盗まれて、悲しい思いをすることがあります。また、ヨハネ福音書 1 章には、「暗闇」や「人の欲」が、光や神に敵対し、それらを拒絶していると述べられています（ヨハネ 1:5,11,13）。

ところで、「わたしを苦しめる者」というのは実は、遠く離れたところにいるのではありません。世の中には、災害や戦争など、私たちの人生や生活をかき乱すものがあります。それらによって、また同時に、私の内側の問題、私の心そのものによって、不安、憎しみ、ねたみ、怒りなどが湧き起こってきます。そして、しばしば私たちは、誰も分かってくれる人はいないと、自分の気持ちを隠し、孤独に陥っていきます。

誰しも、安らかな生活を願っています。神を愛し、隣人を愛する人生を送りたいと思っているところに、それらの敵が立ちはだかり邪魔をするのです。

最初に戻りましょう。「神はあなたを知っておられる」、殊に、あなたの苦しみを知っておられます。そして神は、いろいろあなたを苦しめるものがある中で、あなたの心の中に、苦しみの元があることを見抜いておられます。怒りが収まらなかったり、人をねたんだりするのを、神は知っていてくださいます。神はあなたを見ていてくださいます。

詩編 23:4――

死の陰(かげ)の谷を行くときも

　　わたしは災いを恐れない。

あなたがわたしと共にいてくださる。

あなたの鞭(むち)、あなたの杖(つえ)

それがわたしを力づける。

ここには、「わたしを苦しめる者」、その敵の中で最も恐るべきものは、「死」であることが提示されています。

「死の陰(かげ)の谷を行くとき」……誰しもが通らなければならない「死の陰(かげ)の谷」です。人生の最期に死に向き合うとき、また、人生の途上で生きがいを無くすとき、私たちは悩み苦しみます。しかし、絶望してしまいそうな私たち「と共にいてくださる」のが、神です。「鞭」となり「杖」となって、神は私たちを支えてくださいます。

それでは、「神はあなたの苦しみを知っておられる」という神は、ただ知っているだけ、ただご覧になっているだけなのでしょうか。神は「知っておられる」うえで、何をなされるのでしょうか。その先を、今日の聖書は物語っています。

ヨハネ福音書 10:11――

わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。

良い羊飼いは、自分の命を投げ出して、苦しみ悲しんでいる人を助け出すというのです。まさに、これにまさる愛はありません。雇い人が羊を置き去りにし、狼によって羊の命が奪い取られるというのと、良い羊飼いが自分の羊のために「命を捨てる」（ヨハネ 10:11,15,17,18）というのでは、正反対です。

迷っていた羊を見つけ出し、囲いに入れ、その羊が死の苦難に遭うとき、良い羊飼いはその身代わりになって死ぬのです。ここに、まことの愛があります。その通り、主イエス・キリストは十字架において、命を捨ててくださいました。そうして、主イエスは、最も怖(こわ)い敵である死を滅ぼしてくださいました。

主イエス・キリストがすでに十字架にかかり、よみがえられたので、私たちはもはや、死と罪の恐れから解き放たれています。

「命のある限り 恵みと慈しみはいつもわたしを追って来るであろう」（詩編 23:6）との約束が、私たちに永遠の命が与えられる（ヨハネ 10:28）ことによって実現しました。幸いにも、それは日々の食卓において、感謝すべきこととなりました。

詩編 23:5――

わたしを苦しめる者を前にしても

あなたはわたしに食卓を整えてくださる。

わたしの頭(あたま)に香油を注ぎ

わたしの杯(さかずき)を溢(あふ)れさせてくださる。

これはまさに、主イエス・キリストによる最後の晩餐の光景です（マタイ 26:20,26）。そして、私たちが礼拝で聖餐にあずかるということは、人生の敵、悪意、罪、死などから救い出された者が、それらのものの目前で、神の祝福の宴にあ

ずかることだと分かります。主の聖餐に恵まれた人は、日々の食卓においてもまた、喜びと感謝が溢(あふ)れるようになります。

第二のポイントへ移りましょう。

ここでの要点は、ヨハネ福音書 10:14「わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている」に基づいて、神と私とは「互いに知っている」ということです。

神があなたを知っておられるということが、最重要なことですが、神の知識（全知）と愛は、あなたからの応答を呼び起こします。神は、あなたがもっともっと神を知るように、願っておられます。

分かり易く言えば、神と私たちは知り合いです。しかしながら、聖書で使われている「知っている」という言葉は平易ながらも、深い意味を持っています。それは上の句が、「わたしは自分の羊を愛しており、羊もわたしを愛している」と言い換えられるように、「知る」とは「愛する」ことにほかなりません。その通り、私たちは主イエス・キリストを愛しています。

誰かが、私のことを（単に情報として）「知っている」ならば、そうなんですかで済むこともあるでしょう。しかし、神が私を愛している、とすれば、どうでしょうか。尊い犠牲を払って自分を愛してくださっている神を、私もまた愛するのではないでしょうか。そこに、互いに愛し合う、愛の交わりが生まれるのではないでしょうか。

説教の結びとして、第三のポイントについてお話ししましょう。

第二のポイントで、「羊もわたしを知っている」、すなわち、「私は神を知っている」が出て来ました。そうだとすれば、何か「情報」が無ければ、と疑問に思う人もいることでしょう。

その点で、私たちは神の声を聞いていると言います。

ヨハネ福音書 10:4――

（羊飼いは）自分の羊をすべて連れ出すと、先頭に立って行く。羊はその声を知っているので、ついて行く。

ヨハネ福音書 10:16――

わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。

説教前に歌った讃美歌Ｉ－213 番 1 節の歌詞に、「いこいの水際(みぎわ)に 我らをみちびく その声」とありました。その 2 節・3 節には、「～ちゃん、どこにいるの」というように迷える羊を探し尋ねるとき、また、神の御旨(みむね)を諭(さと)し教えるとき、羊飼いの「その声」が響いてくるとあります。

従って、私たちは「その声」（神のひと・主イエスの声）によって、神がどんなお方であるのか、また、神が何を考えておられるのか、を知ることができます。そして、神の福音を告げ広めるように、私たちもまた、説教により証(あか)しにより「声」を響かせています。

神は今、私たちがそれぞれに、どんな一週間を過ごすことを願っておられるのか、「声」で教えてくださっています。「その声」は、イエス・キリストそのもの、「言(ことば)」であり、また、聖書によって神の「言葉」があらわされています。その「言葉」を聞く、それをしっかりと受け止めるのが、礼拝です。

ヨハネ福音書 10:16――

こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる。

〔直訳〕こうして、一つの群れとなり、一人の羊飼いとなるであろう。

この礼拝で、十字架と復活の主から「言葉」を聞いたとき、或る人は「この一週間、主にあって明るく元気に生きなさい」、また或る人は「この一週間の内に苦難が起こる、それに耐えられるよう謙(へりくだ)って歩みなさい」とのメッセージを受け取るかも知れません。そのように、私たちはそれぞれに、神の声を、違ったふうに聞くことでしょう。

しかし、私たちは一つの神の声、一つの説教を聞いたという点で、私たち、茅ヶ崎香川教会の人々は、子どもから大人まで、「一つの群れになる」のです（エフェソの信徒への手紙 4:3-7）。主イエスは、自分勝手になりそうな羊を見捨てずに守り、また、羊一匹一匹の違い・個性を大切にしながら、一つの群れにしてくださいます。

神はあなたを知っておられる……この一週間、主の平安のうちに歩んでいきましょう。